

京都の祭りと民間信仰

——暮らしのなかの祈り——

川口 朋子

みなさん、こんにちは。今、工藤先生からご紹介に預かりました川口朋子と申します。金曜日の夕方にお集まりいただきまして、ありがとうございます。この九十分間、私の話にお付き合いただければと思います。今、工藤先生に紹介していただきましたように、私は、宗教学の専門家ではないんですけれども、京都の町の歴史に興味をもつて、それを専門に勉強してきました。町の歴史を研究するうえで、自然とその町に住む人々の歴史にも興味を持つようになったので、今日は、京都に住む人々の暮らし、その暮らしに密着したお祭りとか民間信仰について、みなさんにお話したいと思います。そして、今日の宗教講座を通して、私なりにみなさんに伝えたいメッセージというものがありますので、それが伝わるように頑張ってお話したいと思います。

まず、京都のお祭りとか民間信仰を知る前に、私たちの遠い遠い祖先、むかしむかし、日本人がどのような生活をしてきたのかということを知る必要があるかと思います。つまり、日本人がどのような伝統的な生活を送ってきたのか、ということになります。現在の私たちの生活とはずいぶん違う点もありますし、共通している点もあります。例えば食事。日本人が伝統的な生活を送っていたとされる時代には「米」を主食とする生活が当たり前でした。今みなさんのような特に若い女性のなかには、お米を食べない人が増えていくそうです。「お米を食べると太るから」という声も聞きますし、「パンが手軽で美味しいから」とか、「パスタの方がカロリーが低いから」とか、そういう勘違いでお米を食べない人が非常に多くなっていますけれども、お米は、栄養価が高いだけでなく、日本では食糧自給率が九割を超えていて、現在でもほぼ自給自足できている作物です。昔、日本人は米を育てて、収穫をして食べて生活をしてきたんですけれども、お米というのは植えておけば勝手に育つものではありません。まず五月頃に、農家では田植えをします。これは苗を植えていく作業ですが、その前に種を用意し稲を育て、田んぼを耕したり水を張ったり、いろいろ準備が必要です。それから米作りには季節ごとの天候が重要で、おいしいお米を収穫するには、梅雨の時期にたくさん雨が降って、夏には稲に日が当たってすくすく

京都の祭りと民間信仰

と育つことが大切です。穂が出て実ると秋に収穫します。それを脱穀して精米したものを、家庭で私たちが炊いてやっとお米として食べられるんです。ただ、米を主食とする生活を送るには、どうしても水田の近くに住む必要がでてきます。世界には定住しない、例えば、季節ごとに家畜の群をともなつて点々と住む場所を変える、いわゆる遊牧生活を送っているような人々もいます。日本人の場合にはお米を主食とするので、お米の育ち具合を頻繁に観察して手入れをするためにどうしても水田のそばに定住する必要があります。この定住生活は、現在では、農薬が改良されたり、機械化が進んだり、品種改良が進んだりして秋に美味しいお米を収穫できる確率は随分高くなりましたが、昔はもっと不安定な生活でした。つまり、その年にお米がどれだけ収穫できるのかわからない生活でした。それはなぜかというと、天候に左右されるからです。例えば、夏、毎日毎日とても暑い日が続いて日照りになってしまふ年もあるでしょう。それから、梅雨に十分な雨が降らない。日照りとは逆に、夏の気温が十分に上がらない、涼しい夏になってしまふ。冷夏と言います。害虫が発生したり、予想もしていない災害が起こることもあります。川が氾濫して水田が水浸しになった。台風が来て稲がなぎ倒されてしまった。そうやって日照りとか冷害とか自然災害が発生すると、お米の出来が悪くなります。けれども、その年が天

候に恵まれると秋に美味しいお米がたくさん獲れる。豊作になるんですね。このように、昔の日本人というのは自然や天候に直接左右される生活を送っていました。現在だったら、例えば台風が来るとなると、気象予報士のお姉さんがテレビで気象予報図の前に立って、なぜ台風が来るか、そのメカニズムから、いつ来るか、どれくらい大きいのか、風向きや風力がどうなのか、どのような対策をとったら良いのかまで事細かに説明してくれます。でも、現代のように科学が発達していない昔というのは、人々にとっては台風はかなり突発的に遭遇するものです。台風がよく発生する季節は分かっていますが、正確には予想できないわけですね。それから、台風などの自然災害が発生するそのメカニズムが解明されていない時代は、災害が発生したり米が不作の年が続いたりすると、人々は「これはきつと神様が怒っているんじゃないか」とか、「祟りなんじゃないか」と考えたわけです。逆に、豊作になると「これはきつと神様の恵みだ」と考えました。昔の日本人は、自分たちの力ではどうしようもない自然界のなかに、自分たちの力が及ばない存在を見出したのです。自然界にはたくさん神様が存在している。だから自然に左右されながら営む自分たちの生活は、神様の存在に影響されているんだという思想を持っていました。そこから、自然に対して人間の力では適わない、コントロールできないものなのだ、というような自

京都の祭りと民間信仰

然への謙虚な気持ち、敬虔な精神性も育まれていったのです。随分かいつまんで話をしていますが、自然を敬う気持ちは、日本独自のシャーマニズムの思想も育みました。柔らかくいうと、自然の中に様々な神様がたくさんいる。神様は自然から生まれ、自然を生み、自然と共に生きているというような考え方です。このような昔の日本人のような考え方というのは、現代を生きる私たちにも何となくスツと入ってくるかもしれないし、腑に落ちるかもしれません。けれども、これは必ずしも欧米など異なる文化圏でも共通する考え方とは限りません。

自然に対する日本人と西洋の人々の考え方の違いを次の写真で見てみたいと思います。それぞれの文化圏では有名な庭園ですので、日本と欧米の自然観の違いを象徴していると思います。庭園の中に植物、つまり自然がありますが、それにどれぐらい人間が手を加えているのかというところに注目して見ていただきたいのです。初めの二枚は、これはどちらもフランスの庭園です。ベルサイユ宮殿の庭園、直線と曲線のみで構成されている非常に幾何学的な庭園であるということがわかります。それから、植木は左右対称、シンメトリに人工的に手が加えられています。花壇の中を見ても、きちんと高さが揃えられた植

木が複雑な模様を描いてるわけです。もちろん本来自然界の植物がこのような姿をしているわけではないので、こんなにもきつちりと人間が手を加えているのですね。それから奥に池がありますけど、角がほぼ九〇度の真四角に作られています。下の写真はフランスにあるフォントネー修道院のお庭です。修道院とは、キリスト教において神様の教えをできるだけ忠実に守って生きるために共同生活をしている施設です。庭園を見ると、歩道のように人々が歩く場所とそうでない芝生がきつちりと分けられていて、やはり植木も綺麗な形に整えられていて、木が定められた場所にきつちり立っているような、こちらも幾何学的に作られた庭園です。このフランスの例からは、「自然は人間がコントロールできる対象」と考えている文化圏も存在することがわかります。自然に対して人間が手を加えることで美しくする。そういった考え方が庭作りに反映されていることがわかんと思います。決して欧米の人々が自然に対して傲慢だということではありませんが、では、自然の中に神が宿ると考えた我々の祖先はどういった庭を造ったのでしょうか。これはどちらも京都市内にある庭園です。上は西芳寺、通称、苔寺と呼ばれるお寺のお庭です。苔寺は大学の近くですね、松尾大社から歩いて行ける距離にあります。苔寺と言うだけあって、苔の美しさが非常に有名なお寺です。写真をなんとなく見ると地面からごつごつとした岩が浮き

京都の祭りと民間信仰

出っていて、これが庭なのかしらと思うかもしれませんが、これは「枯山水」という手法で造られた庭です。枯山水というのは、水を一滴も使わないで、主に岩や石、砂などを使って水の動きを表現する庭の造り方です。苔寺の場合は、山の斜面を利用して石を配置して、水の流れを表現しているのです。下の写真は二条城のお庭です。二条城の二の丸庭園という、御殿の中から一番見栄えのするお庭です。こちらには水が使われています。この水はもちろん引いてきますし、岩が適当な場所に配置され、松も人間によって植樹されたものです。けれども、これを見ると、岩は岩の形のまま、表面がごつごつした本来の姿をよく残しています。石の専門家に言わせると、石には顔があつて、顔が正面を向くように配置することが重要だそうです。そして、人間が庭園の中を散策して楽しめるように、右側に石橋が架けられていますけれども、石を利用した橋ですね。それから奥に小さな丘のようなもの、「築山」と言われる小山もあります。けれどもこれを見ると、いくらか人間が手を加えているとはいっても、できるだけ自然のままの形をいかして庭を造っているということがわかるかと思います。こちらの写真と見比べると、明らかに違いがあつて、これはやはり、自然に対して人間がコントロールすることはできない、神聖が侵すことができないものという精神性が、造園という目に見える形で反映されているという

ことです。

このように、自然の中にはたくさん神様が宿るといふような考え方から、日本には民族宗教として“神道”というものが発生しました。これはいつ発生したのかというと明らかではありません。むかしむかしの人々の営みの積み重ねなので、自然に発生したと言えます。神様は何人いるのかというと、これもはつきりせず、自然の中にいっぱいおられるわけですね。山の神様、川の神様、水の神様、石の神様…、だから多神教と言えます。それから、系統的な教義を持っていないというのは、「これこれをしなさい」という規律・戒律がないということです。このような神道の精神性というのは現在の私たちの生活の中にも表れています。例えば、神道でたくさんいる神様のことを、八百万の神と書いて、八百万やおよろずの神と言いますけれども、二〇〇一年に、スタジオジブリが『千と千尋の神隠し』という映画を公開しました。たぶん見たことあるんじゃないかなと思います。『千と千尋の神隠し』の中で、主人公の千尋という小学生の女の子が、湯屋、つまりお風呂やさんで働く場面がありますけれども、そこに八百万の神様が訪れるわけです。形もさまざま、服装なんかもさまざま、性格もさまざま、たくさんのお風呂やさんを訪れます。

京都の祭りと民間信仰

現代の映画の中にもこういった考え方は見られるということです。それから、みなさんも時々ミネラルウォーターを飲むことがあると思いますが、ミネラルウォーターの中に、サントリーが出している『天然水』というものがあります。そのCMを見ると、キャッチコピーが「山の神様がくれた天然水」という言葉なんです。山の神様がくれた天然水とあって、次にサントリーのペットボトルが画面に出てきます。それも飲料メーカーとしては、「このミネラルウォーターは山の恵みである、清いおいしい水」というようなイメージを持つてもらうことで、お客さんにたくさん買ってもらおうという戦略なのですね。みなさんが「山の神様がくれた天然水」と聞いても割としっくりくるというのは、自然の中にたくさんさんの神様がいますという神道の考え方を、それほど違和感なく自分の生活の中に受け入れる社会の中で生きているということです。

ここで、少し世界の他の宗教にも目を向けてみましょう。世界には、たくさんさんの信者を抱えている宗教がいろいろありますけれども、例えばキリスト教とかユダヤ教、イスラム教というのは、神道とは違って一神教です。つまり、この世界の中に神様は一人しかいないと考えられているわけです。キリスト教であればイエス・キリスト以外にこの世の中に神様は存在しないと考えます。それから系統的な教義を持っている宗教も多くて、イスラ

ム教の場合には、有名なものとして一日五回、聖地であるメッカの方向へ向かって礼拝するとか、ラマダーンの時期には太陽が昇っている間にはごはんや飲み物を口にしない、断食をするとか。タバコを吸ってはいけない。それから生きている間に一度は聖地を巡礼しなければいけないといういろんな教えがあり、イスラム教を信仰する者はそれを守らなければなりません。このような宗教と比較すると、神道というのは枠組みがあやふやで、曖昧な信仰のイメージがあるかと思います。

ここまで日本人の古代から育まれた宗教文化、その背景、精神性についてお話しました。次にお祭りについてお話したいと思います。こういった自然界にいるたくさんの神様を古代日本人はおまつりしてきました。おまつりしてきたといってみなさんどういったイメージを持ちますか。おまつりという法被を着たり、御輿を担いで、すごく賑やかなイベントが行われるイメージがあると思いますけれども、元々、「おまつり」というのは、神様をお迎えして、神様にお酒とか食べ物をお供えする行為を意味します。自然界にいる神様が降りてくる場所、「依り代よりしろ」と言いますけれども、降りてくる場所にお酒とか食べ物をお供えするんですね。その依り代に建物が建つと、「お社やしろ」、神社になっていきます。

京都の祭りと民間信仰

どうして人間はこのように神様をお祭りするのでしょうか。神様にお酒とか食べ物をお供えするのでしょうか。それは例えば山の神様が怒りませんようにとか、川の神様が機嫌を悪くしませんようにとか、いろんな願いがあるわけです。神様をお祭りすることで、天候に恵まれて稲作を中心とした自分たちの生活が安定するように望んだのです。つまりお祭りというのは賑やかな側面も確かにありますけれども、何より人々の希望や願いが込められているということです。なんとなく御神輿を担いだり、なんとなく行列でぞろぞろ歩くのではなくて、必ずそこに人々の思い・願いが込められています。そこで京都のお祭りをここからみていきたいと思います。そして京都の人々がそのお祭りを行うことで、どういう願いを込めたのか、祈りを込めたのかということをみていきたいと思います。

まず最初に取り上げるのは葵祭です。京都の三大祭の一つと言われる大きなお祭りです。毎年五月十五日に行われます。これ見たことある人いますか。ほとんどいないですけれども、これ何のためにこういったお祭りをするのかと言うと、六世紀、今から約一五〇〇年ほど前に、京都で、なかなかお米ができない年が続きました。凶作が続いたその時に、「ああ、これはきつと神様がお怒りになっているんだ」と考えた当時の人々が、その神様

の崇りを鎮めるためにはじめたのが葵祭です。当時、京都には「賀茂の神様」という神様がいましたので、「きつとこれは賀茂の神様が怒っている」と考えたんですね。つまり、葵祭というのは、五穀豊穡を祈って始めたのがそもその始まりです。お米が獲れますように、野菜が獲れますように、そういった祈りを込めて始めたお祭りです。京都に平安京が造られる前の時代の話です。現在でも賀茂の神様がおられる上賀茂神社と下鴨神社のお祭りとして続いています。この写真は、お祭りの様子です。葵祭は京都御所から出発して、てくてく…京都の町を歩いていきます。まず下鴨神社に到着します。そこでお昼休憩をして、また、てくてく…上賀茂神社まで進んでいく、その様子ですけれども、これは当時の昔の人々の格好をした行列です。牛の車と書いて「牛車」と読みますが、牛車をお供の人々が引いているわけです。この牛車の背中にある小部屋の中には身分の高い人が座っています。ちょうど五月なので牛車は藤の花で飾られています。それから、これは馬に乗って、烏帽子をかぶり狩衣という公家のスタイルをして歩いている人の姿です。冠に緑の葉っぱがついているのが見えると思います。これが葵祭と言われる起源で、葵という植物の葉っぱを必ず冠などにつけるんですね。だから葵祭と言われています。

京都の祭りと民間信仰

次に、葵祭よりもっと多くの観光客が訪れるお祭りとして、祇園祭をみてみたいと思います。祇園祭はおそらく名前は聞いたことがあるとか、一回くらい行ったことがあるという人がいるかもしれません。祇園祭も何らかの昔の人々の何か願いが込められているはずです。祇園祭は七月の一日から三十一日まで、一ヶ月かけて行われます。この一ヶ月間、毎日何かしらの行事が行われています。その行事を全部ひっくるめて祇園祭と言うのです。七月というのはちょうど梅雨が明けるところ、かなり蒸し暑い時期です。京都の地形を見ると、東と北と西を山に囲まれていて、お椀の底のような地形になっています。盆地の地形は湿気がたまりやすいので非常に蒸し暑いんです。

遡ること九世紀、梅雨から初夏にかけて京都の土地で疫病・伝染病が流行った年がありました。ただでさえ蒸し暑い盆地の京都には、当時平安京という都があり多くの人間が生活していました。昔のことですから、今より病気も発生しやすく流行しやすい環境にあります。この時に疫病神の祟りを鎮めるために始めたのが祇園祭です。つまり、祇園祭というのは、病氣退散、それから病氣平癒、病氣が治ることを願って始まったお祭りです。八坂神社の祭礼です。疫病・伝染病が流行したといっても、なかなかイメージがつかないかもしれません。現在の私たちの生活では伝染病が流行というと、インフルエンザが流行

ったとか、新型のウィルスが蔓延するという程度のイメージかもしれませんが、疫病というのは非常に深刻な問題だったんですね。伝染病が流行る＝すぐ人が死んでしまうくらいその社会全体、国全体にとって深刻な事態なのです。そういうものが伝染病と言われるかというと、昔流行ったものとして、例えば、コレラ・赤痢・腸チフス・ジフテリアというものがあります。おそらく聞いたことがないような病気の名前かもしれませんが。ただ、私の友達が今年の夏にちよつと西アジアに行ったら赤痢に罹ったと言っていました。どうして日本では罹らないのに他の地域で罹るのかと言うと、一つに衛生環境の問題があります。なぜこの祇園祭が始まった九世紀に疫病が流行ったのか。当時の衛生環境をちよつと見てみたいと思います。

だいたい九世紀から十世紀頃を想定します。まず排泄物の処理ですが、現在は水洗トイレが普及していますので、用を足したらレバーを押せば、排泄物が下水管中を通って流れて、下水処理場でキレイに処理されて海や川に流されています。けれども九世紀から十世紀にかけて、もちろん今のような下水管はありませんので、どうするかというと、基本的には庶民の場合放置することが多かったようです。平安京に住む庶民のトイレは、家の周りに巡らされた溝であつてそこで普通に用を足していたと言われています。衛生面やプラ

京都の祭りと民間信仰

イバシーに配慮した現在のようないトイレはもちろんありません。それからゴミの処理についてですが、ゴミは、今だと燃えるゴミと燃えないゴミに分別し、燃えるゴミは何曜日と何曜日に出すことと定められていて、その日にゴミ収集車が回収に来ますけれども、昔は都市における塵芥収集は徹底されていません。まず、大前提として現代ほどゴミも多く出なかった、人間も多くなかったということもあります。ゴミ溜めのようなところに放置するのが普通だったそうです。それから死人の処理。これは今では想像が付きませんけれども、平安京の時代、行き倒れの人間は、今よりずっと日常的に都市の中に存在していました。けっして珍しくはないのです。道端で飢えてそのまま倒れてしまう人間の存在も、街の風景の一部でした。これらのことは、『平安京の二オイ』という本があつて、それを讀むと、雅で華やかなイメージばかりを抱きがちな平安京の日常を、臭い・匂いという面白い観点から見つめています。生活していく上で避けては通れない排泄物やゴミ、死臭みたいなものにスポットライトを当てた研究です。水洗便所がこれほど一般化したのは、京都市内ではここ二、三十年のことです。疫病がはやる背景に、昔はもっと衛生環境が悪かったという話です。それから食糧事情の問題もあります。今は二四時間営業のスーパーやコンビニも多いですし、食べたい時に店へ行けば、季節を問わず、食べたいものが棚に並ん

でいて、お金を払えばすぐに食べることができます。けれども、平安京の時代、天候次第ではお米が実らず飢饉が発生しますし、食べ物がないというのは体力が落ちますので、伝染病が流行った場合に瞬く間に広がってしまうんですね。そして、特效薬ありません。このような環境にあったからこそ、疫病神がいなくなることを昔の人々は願ったし、祇園祭も始まったわけです。

これは今年の宵山、宵々山の風景です。祭りの山車、^{ヤマ}「山」とか^{ホコ}「鉦」とか呼ばれるものが止まった状態でほぼ展示してある様子です。これは夜ですので、たくさんのお店が出ており、みなさん山や鉦を見物したり、出店で食べ物を買ったりしてそぞろ歩くんです。だいたい毎年二十万人から三十万人くらいの観光客が訪れます。元々はそのような疫病退散を願って始まったお祭りとは思えないほど、情緒があり雰囲気があるお祭りです。山車を見てみると、これは鉦と呼ばれるもので、山よりずっと大きく重い山車ですけれども、ちょうど二階の部分に笛とか鐘、太鼓でお囃子をする人々が乗っていて、屋根の上にも乗っていますね。そして手前にいる人々が綱を引いて、山車に車がついていますので、山車を引いて巡行します。いろんな鉦とか山があります。これは「船鉦」と呼ばれる船の形をした非常にユニークな鉦です。大きな車がついていますので、それを引っ張る。ゴトゴト

京都の祭りと民間信仰

：ゆつくり巡行していきます。このように鯉が乗っている山車もあります。“鯉山”という山車です。これも同じようにゴロゴロ引かれていきます。こういった山車は非常に美しいのです。タペストリー、織物なんかで飾りつけられていて非常に華やかです。こういったものが観光客の人が一度見てみたいということことで、お客を引き寄せるのかなと思います。

祇園祭が終わると、京都では八月に五山の送り火があります。これは八月十六日に行われます。送り火が灯っている時間は非常にわずかです。夜の八時に東山の“大”の字に火が灯ります。それから反時計回りに、ぐるっと十分間隔で“法”“妙”とか、左側にあるので同じ“大”ですが“左大文字”、それから北の方に船の形をしたものもあります。嵐山には鳥居の形をした送り火もあります。これらが順々に点火されていくわけですね。このお祭りでは、京都市内の中でこの送り火がいつぺんに見える所はどこだろう？ということ、高い建物を探したり、一番よく見えるスポットを探したりするのが毎年流行るんですけれども、五山の送り火はただ単に山に火を灯しているわけではありません。これは元々なぜ始まったのかと言いますと、八月十六日というのは、京都ではちょうどお盆の終

わりの時期に当たります。お盆の時期は家に祖先の霊が帰ってきますので、その祖先の霊をまたあの世へ送りますが、その送る時に山に火を灯して帰り道を明るくするのです。祖先が迷わずあの世へ帰れますようにという事で、この送り火を灯すのです。ちよつと送り火のメカニズムをみてみましょう。右上に大きく「大」の字が燃えているのが分かりますけれども、よく見ると、文字は一つ一つの点の集まりで構成されていて、遠くから見ると大の字に見えます。この一つ一つの点々は、左のような、「火床ひとこ」と呼ばれる、火を燃やす場所が繋がっているわけです。この火床に「護摩木」と呼ばれる木を井形に組んで、それに火を灯して時を見計らって八時から順番に火をつけていくわけです。そして、ただ単に火を燃やしてそれで終わりではなくて、この大文字の送り火の中にはいろんな言い伝えがあります。例えば器を用意してお酒やお水を注ぎ、火が燃えている時に、火が灯っている大の字を器に映して、それを飲む、そうすると病気に罹らないという言い伝えがあります。それから、ナスに穴を開けて大の字を見ると、目の病に罹らないとも言われます。それから護摩木、さつき火床になるために組んでいた木ですが、この護摩木は前日まで送り火の麓にある神社の御門前などで買うことができます。護摩木に自分の名前と年齢、性別を書いて奉納して燃やしてもらうと、これまた病気に罹らないとされています。さらに

京都の祭りと民間信仰

大文字の送り火が燃えきってしまった、その翌朝、燃え残りの炭を取りにいくわけですから、取りに行つて戸口に飾ると災い避けになる、こういう言い伝えもあります。このような言い伝えは科学的な根拠はないわけです。迷信であつたり俗信であつたり、呪術的、占いのようなものですね、非科学的なものですけれども、こういう生活の中で親から子へ伝えられたり、地域で伝承されている教えを民間信仰と呼びます。民間信仰の特徴は組織的な教団・組織を持たないこと、それから規律や戒律といった教義を持たないこと、それから自然に発生して言い伝えられて残つていたり書物に書かれて残つていたりすること、そして生活の一部であるということです。祇園祭の中でも民間信仰は見られます。

大文字の送り火から一ヶ月時間を巻き戻して、祇園祭の話ですが、祇園祭が行われる七月中というのは、その山車、山とか鉦を出す町内の人々はキュウリを食べないというならわしがあります。もしくは食べてはいけないという信仰ですが、これはなぜかと言うと、八坂神社の神紋(マーク)がキュウリに非常に良く似ているからです。右側にある写真が八坂神社の神紋ですけれども、キュウリを切った時、キュウリの断面がちょうど八坂神社のマークに似ている、それで恐れ多いということで、食べてはいけないとか、食べないと言われています。これは、私は個人的にはそのように言われているだけで守っている人

はあまりいいのかなと思っていたのですが、今年、京都の伝統的な町家の生活を伝え残している家として有名な秦家というお宅に祇園祭のお手伝いに行った時、祇園祭のある一ヶ月間は食事時にキュウリを食べないと伺いました。キュウリを間違って買いそうになつて、「いけない、いけない」と慌てて買わなかった、というお手伝いさんのお話も伺いましたので、言い伝えを実際に守っておられる姿に感動しました。

その他にも京都に残る民間信仰を見てみたいと思います。この写真は夏です。ちようど六月に行われるものですけれども、「夏越なごしの祓はらえ」というものです。これは六月の三十日に、大きい神社から小さい神社まで、市内のあちこちの神社の境内にこのような大きな輪っかが作られていることがあります。この輪っかは「茅ちや」という植物を編んで作っているんです。だから「茅ちのの輪わ」と言います。この茅の輪をくぐることで、六月三十日というのは年が明けて一月一日からちようど半年になりますので、残りの半年間も無事に健康で過すごせると言われています。この茅を引き抜いて持って帰って家に大事に飾る家庭もあります。ちようど蒸し暑い梅雨の時期ですし、夏バテをしないように、残り半年健康に過すごせませうという願いを込めて夏越の祓が行われるのです。もう一つこの時期に暑気払いしよきばらいにな

京都の祭りと民間信仰

るお菓子を食べます。京菓子としてよく紹介されますけれども、「水無月」というお菓子です。下の部分は、葛やういろうで固められています。その上に小豆をあしらっています。これはお菓子の形が三角であることがポイントで、三角形は氷を意味します。それから小豆は悪魔払いの意味があるとも言われます。蒸し暑い時期に氷を意味する水無月を食べることで暑氣払いになるといわれます。水無月は今は一年中スーパ－で見られるようにはなりませんでしたけれども、六月頃に和菓子屋さんの前を通ると、「水無月できました」「水無月あります」という小さな看板が掲げられていることがあります。それを見ると、「ああ、六月になったんだな」と実感するわけです。そういった季節を感じさせる京菓子でもあります。

いつきに季節が進んで冬の話ですが、今日が十一月の最終日ですので、だいたい来週から再来週にかけて京都のいろんなお寺で行われるイベントの写真です。千本釈迦堂のものが有名ですが、だいこ「大根炊き」と言います。大根を大釜に入れて炊いて食べると厄よけになるとか中風よけになると言われているんですね。これはもちろん、観光客の方が大根炊きを目当てにそのお寺とか神社に行くということはあるんですけども、地元の人が

けに商店街や地域で大根炊きが開催されることも多く、数百円で振る舞われることも多いです。これもただ単に大根を食べるのではなくて、十二月のちょうど寒い時期ですので、風邪に罹りませんように、という願いを込めて行われるわけです。暑い夏には夏越しの祓を行いますし、寒い冬には大根炊き、その他健康を願う行事は数多くありますけれども、それを行うことで互いに健康でいられますようにと願うわけです。

今までは生活するうえで最重要事項である健康とか食べ物に関する昔の人々の願いを紹介しましたけれども、ほかにも次のようなものがあります。例えば、縁切り・縁結びに関するものです。これは何かというと、人間関係の煩わしさを解消してほしいという願いが込められていますね。東山にある安井金比羅宮という、神社での様子です。割と若い女性に人気なんですけど、行ったことある人いますか？ 知ってたって人いますか？ 全然知りません。縁結びの場所として有名ですけども、縁切りもして下さる場所です。これは右側に「形代^{かたしろ}」という小さなお札がありますけれども、お札に縁を切りたい人の名前、もしくは縁を結びたい人の名前を書いて、大きな岩の上にペタッと貼るわけです。貼って、穴を手前から奥に通るか、もしくは奥から手前に通るかで、縁を結ぶか、縁切りか、どちらかが叶うわけです。だから穴の通り方は間違えないようにしないといけないので

京都の祭りと民間信仰

す。これを見ると非常に面白くて、縁結びを祈る気持ちには分かりやすいですね。人間関係の縁だと、誰かと結ばれますようにだとか、仕事の縁だと、良い仕事に巡り会いますようにとか、そういったことがあるけれども、縁切りというのは、自分が縁を切りたいだけではなくて、誰々と誰々さんが別れますようにとか、そういった縁切りの願いもこめられています。形代に書かれているわけです。そのことを知っていると、非常に大きなドーム型の岩が人々の壮絶な想い、願いだけでなく恨みつらみも含めて、人間関係を思い通りにしたいという切なる願いがこもっているのが良くわかんと思います。

それから、その他の民間信仰として、“供養祭”というものを紹介したいと思います。供養というと死んだ者の霊を弔う行為を思い浮かべますが、今から紹介する供養祭は、死者を供養するのではなく、ものを供養します。供養することで、自分の技や技術が上達しますようにという願いもこもっています。

これは嵐山にある法輪寺で行われている“針供養”と呼ばれるものです。針を二月と十二月、寒い時期に行われますけれども、針には細い糸がついています。その針をこんにゃくの上に刺している様子です。これが供養していることになります。一年間お世話になっ

た針に感謝をして、針が上手になりますように、技が上達しますようにという思いを込めている。特に京都の場合には、和装関係のお仕事に携わっておられる方はまだまだ多いですね。西陣織とか、友禪染とか。だから針子さんと言いますけれども、針を使ってお仕事をする人は多いんです。だからこのように針に感謝の気持ちを込めて、それから上達を願って供養をします。“供養祭”というのはまだまだものが少ない時代に、物を大事にするという気持ちから生まれたものです。現在だと、お金を出せば針だって何だってすぐ買えると思うかもしれませんが、昔は針がもっと身近な生活必需品でしたので、命があるように大事に使い、折れたり使えなくなると気持ちを込めて供養したのです。

供養するものは針だけではありません。櫛の供養も行われます。“櫛供養”と呼ばれるものです。安井金比羅宮という縁切り・縁結びの神社を紹介しましたけれども、そこで行われている櫛供養です。櫛供養の場合には、女性が使う櫛が奉納されることが多いので、もっとキレイになりたいとか、髪が美しくなりたいとか、そういう気持ちも込められています。櫛供養を行う際に、同時に“櫛祭り”というお祭りも行われていて、これも非常に華やかで面白いお祭りです。安井金比羅宮というのは近くに花街と呼ばれる、舞妓さんとか芸妓さんが働いているお茶屋さんが多く建ち並んでいますので、その女性や一般公募

京都の祭りと民間信仰

した女性たちが、古代から近代まで、その時代その時代の女性の髪型と服装をして、町を
ねり歩くのです。時代ごとの衣装をする点は、時代祭とも似ていますね。

そして、次に筆を供養する行事も紹介します。東福寺の塔頭で行われているんですけれども、広場の中心に筆を積み上げて、その周りに竹で作った巨大な筆を立て掛け、火をつけて燃やします。昔は文章を書くのも手紙を書くのも何でも筆を用います。今はシャーペンにボールペン、鉛筆がありますが、昔、筆というのは非常に大事な日用品でした。硯で墨を擦って、墨を筆の先につけて使います。筆の使い方は学校で習字の時間に習ったと思いますが、昔は日常的に筆を用いて書くのです。東福寺の筆供養では、文章を書くための筆以外にも、絵筆も供養することができます。

今見てきたように、お祭りとか年中行事には民間信仰と呼ばれるものも多く、ただ何となくやっているわけではなくて、長い長い歴史の中で、私たちの祖先が、日々、いろんな悩みとか苦しみを抱え、それを解決するために生まれ、行われてきたものが多いことが分かるかと思います。観光客が大勢訪れる有名なお祭りも、起源をたどると神様の祟りを鎮めるために、という人間の思いが生み出したものです。そうやって日々を生き抜いてきた

ことの表れでもあります。京都は毎日どこかでお祭りをやっている、という言葉聞いたことがある人いるかもしれません。大きなお祭りから地域的な小さなお祭りまで、京都では三六五日、毎日どこかでお祭りが行われていると言われています。それは、それだけたくさん、そこに住む人々の祈りとか、祖先の祈りとか、願い・信仰に満ちているということです。京都は国際的な観光都市ですから、毎年国内外から多くの観光客が訪れます。京都の風情ある町並みや、美しい京料理やお菓子、歴史のある神社寺院などはメディアでもよく紹介されますが、実際の京都は住んでいる者からするととても人間らしい町のように感じています。これは私が感じているということですから、今日のお話させて頂いたような祭りや民間信仰を見ると、昔の人々の様々な願いや祈りなど人間臭いとも言える等身大の人間の姿を感じることができると思います。京都は観光イメージが強い都市ですが、祭りや年間の様々な行事は京都で生活する人々の日常に寄り添う形で生まれ、発展してきたのです。

今日、私が是非みなさんにお伝えしたかったメッセージを最後に述べて頂きたいと思いますが、大学四年間の中で、悩みを抱えることがあると思います。就職のこと、勉強

京都の祭りと民間信仰

のこと、人間関係などいろんな悩みを持ちながら大学生活を送ると思うのですが、そんなときは、せっかくこの京都光華女子大学で勉強されていますので、京都の地で、私たちの祖先がいろんな悩みや苦しみにもがき、解決しようとかがんばってきた、その歴史に思いをさせてみてください。そうすることで、自分の気持ちを慰めて、和らげて、少しでもまた前に進もうと思えたら良いかなと思うのです。なぜなら、昔の人々の願いも、現代の私達が抱く悩みも、悩みを突き詰めると結局は、幸せになりたいという思いは根底の部分で共通しているからです。是非、みなさんが充実した大学生活を送られることを願っています。

もし何か質問がありましたら遠慮なくおっしゃってください。

Q…関係あるかわかりませんが、先ほど供養の話があつたのでちょっと質問させていただきます。お守りの供養ってどうすればいいんでしょうか。

A…お守りは、買った神社にまた持つていくと、そこでご祈祷してくださいます。買った神社でなくても、だいたいどこの神社でも受け付けていただけます。

Q…さつき、平安京のについてお話されましたけど、ヨーロッパの町というのは割と不衛生で、日本の昔の都市というのは随分衛生的だったという印象があるんですけど、そういうのではないんですか。

A…ヨーロッパが不衛生というのも時代にもよると思いますけれども、よくフランス、パリなんかはゴミをそのままアパルトマンの窓から捨てたという話しが有名ですし、それでそのゴミや排泄物を踏まないように、女性がハイヒールを履くようになって、ハイヒールが誕生したということもありますので、不衛生な時代はありましたけど、ただ、かといって日本が衛生的というのも近世江戸など限られた時代、都市のイメージが強いと思います。欧米との違いというと、元々日本の伝統的な生活は、建具や家具など物が少ない暮らし方で、人糞尿を肥料としてリサイクルしていましたので、その結果ゴミが出にくい生活であったという面は確かにあると思います。

—二〇一二年一月三〇日—